

中で考察された。

彼はその際、十九世紀ドイツユダヤ教で起こった改革運動、正統主義、シオニズムのどの運動からも距離をとった。彼はまず自らのユダヤ教に関する理念をユダヤ教教育の改革という仕方でも主張した。この中で彼は「祈禱書こそ、歴史的ユダヤ教の精髓である」と規定した上で、中等教育においてまず祈禱書の祈禱文を用いてヘブライ語をユダヤ人の生徒に教えることを提案している。つまり、シオニストが主張したようにパレスチナへ移住するのではなく、ドイツという離散の地にあつて、伝承されてきた儀礼や祈禱文の意味を理解しながらユダヤ的な生活を復興していくことを目指したといえよう。

その後に書かれた彼の主著『救済の星』でも儀礼的な祈りの重要性が強調されている。本書では、祈りが有効であるためには正しい時に祈ることが必要であるとされる。ローゼンツヴァイクは内容によって祈りが無効となることは無いとする一方、この適時性という基準を用いることによって個人の困窮から発するとつさの祈りの有効性を強く制限するのだ。これに対し、共同体によって唱えられる儀礼的な祈りは、予め祈りの時と場が定められているため正しい時を失することがなく、内容的にも自由度が高いとされた。

しかしながら、ローゼンツヴァイクのこのような祈り理解はこの後変化してゆく。『救済の星』の二年後に書かれた書簡においても一九二五に書かれた論文「新しい思考」においても、異教徒によるとつさの祈りも神に届きうるとされ、さらに、祈りがこの瞬間に叶うようにと願う強い意思こそが祈りに真正さ

を与えるともいわれているのだ。

この変化は、一面では、適時性という基準から倫理的、哲学的に祈りの内容を制限しようとする理神論的な傾向の排除であり、また、他面では、共同体の祈りの重視—たとえば同時代のユダヤ教という文脈ではヘルマン・コーエンやユダヤ教儀礼の研究者エルボーゲンもその重要性を強調していた—の撤回である。ローゼンツヴァイクは、啓蒙主義以来のユダヤ教の科学や理神論的傾向をユダヤ教をキリスト教の基準で裁いているとして批判してきた。本発表で観察された彼の見解の変化は、その残滓を自らの哲学の中にも見出し、これを自己批判したものとみることができるだろう。

存在と情動——レヴィナスからバタイユへ——

伊原木祐

バタイユは一九四〇年代末に発表した書評「実存主義から経済の優位へ」の中で、レヴィナスの著作『実存から実存者へ』を取り上げている。本発表ではこの書評を中心に、レヴィナスからバタイユへの思想的連結線をスケッチしてみたい。

『実存から実存者へ』の狙いは、文字通り「実存から実存者へ」の移行を記述することにある。まずは、非人称的で純粋な存在一般(実存)を探索し、ついで、その存在から主体(実存者)が生起する出来事を描き出そうと試みるわけである。とりわけバタイユの関心を引いたのは、前者の「実存」がもつ異様な性格であった。レヴィナスはそれを「ある」と名づける。存在者なき「ある」の中では、内部／外部、主体／客体、自我／

他者といった二分法が完全に撤廃されてしまう。ここで想起されるのは、井筒俊彦が禅の見性体験(悟り)の頂点に位置づけた「絶対無分節」と呼ばれる位相である。主客の融合・無化を特色とする無分節態は、レヴィナスの存在概念にきわめて近い。

他方、バタイユが重視した「内的経験」とは、恍惚＝脱自(extase)であり、それゆえに自己閉鎖を打ち破る交流(communion)でもある。恍惚の中では主客の区別が立てられず、いわば「大きく口を開けた裂け目」の中に主体も客体も溶解している。書評の中でバタイユ自らが『内的経験』の発想をレヴィナスの「ある」に重ね合わせているが、そこに含意された融即的な無差別性を考慮すると、それはもつともな洞察であったと言える。こうして純粹に形式的な観点からすれば、井筒の「無分節」、レヴィナスの「ある」、バタイユの「内的経験」は、同じ絶対領域の経験を三者三様に表現したものであると見なせよう。だが、この比較はあくまで表面上のものにとどまる。

バタイユの書評は、正当にもレヴィナスの記述に「知的操作」の影を見て取り、それを鋭く批判していた。その操作は「ある」の特異な経験を歪めてしまうのではないか。こうした形でバタイユがレヴィナスに向けた批判は、おそらく井筒の図式にも当てはまる。東洋哲学の共時的構造化を目指す井筒の記述は、明らかに哲学的ロゴスを多用することで内奥の神秘経験を一般化してしまっている。その結果、実存をたえず知から剥離させようとするバタイユ(「非知」の立場)と、実存を論

証的に把握しようとするレヴィナスや井筒との間には、どこまでも乗り越えがたい溝が残るのである。

しかし、これとは別の線引きも可能だろう。バタイユとレヴィナスが重視するにもかかわらず、井筒の無分節論にはまるで欠けている要素がある。それが情動のモチーフである。面白いことに、絶対無分節の事態を禅に即して解説する井筒の議論は、パトスの要素への着目をほとんど含まない。これに対し、レヴィナスとバタイユはいずれも、存在の夜と連動して生起する「不安」や「恐怖」に注目している。そればかりではない。情動そのものに話を限定すれば、『実存から実存者へ』はそこに主体の存立を脅かす混沌への失墜を見たが、これは内的経験を通して「自らを失う」バタイユ的過程に酷似したものである。レヴィナスは別の論考でも、レヴィ＝ブリュルの原始宗教論によりながら、表象に先立つ「情動」を評価し、神秘的な感覚作用に思考や知性とは別次元の経験を認めている。バタイユもまた似た視点から、荒れ狂う「情念」を理性よりも上位に置き、前者にこそ「神的なもの」の意義を見いだした。この両者に見られる情動論は、宗教の根源的な非合理性という問題を考える上でも貴重な手がかりとなるだろう。

〔なお、本発表のフルバージョンは『別冊水声通信——バタイユとその友たち』(水声社刊)に「実存の眩暈」というタイトルで掲載されているのでご参照願いたい。〕